

【天気予報及び概況】

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
気温は、高い確率50%です。
降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)
2023年	18.2	22.9	14.1	40.5
2022年	17.6	22.1	13.4	66.5
2021年	18.8	23.3	14.9	86.5
1991~2020年	18.6	22.6	15.0	142.5

※気温は、1ヶ月の平均値(気象庁)

【作物】

1 落水

落水時期は収穫前7日程度としますが、収穫作業に支障のない程度に刈取り直前まで走り水灌漑で土壌水分を保ってください。

落水が早いと、登熟不良となって品質低下を招くとともに、稈が弱まり倒伏しやすくなります。

2 収穫

刈取り時期は、早過ぎると未熟米や青米が多くなり収量も少なくなります。また、遅過ぎると茶米や胴割粒が発生するとともに、食味や品質が低下するため、下表の収穫適期基準を参考に適期刈取りしてください。

【品種別収穫適期基準】

区分	ヒノヒカリ
出穂後積算温度(°C)	900~1,100
最長稈黄変率(%)	85
出穂後日数(日)	40~46

3 稲架干し

収穫時の籾水分は20~25%ですが、7~10日で17~19%となります。仕上げ水分は14.5%以上15%未満ですので、過乾燥に注意してください。

4 土づくり

稲わらをすき込む際に土壌改良資材(鉄強化美土里60kg/10a)を施用し、地力向上を図ってください。 <桐野>

【野菜】

1 こんにゃく(収穫及び貯蔵)

10月中旬頃から茎葉が黄変、倒伏してきた頃が収穫適期です。天候を見て、晴天時に収穫してください。予備乾燥は、1年生で5~10日、2年生で10~15日、3年生以上では15~25日を目安とします。

また種芋の選別も大切になります。病気や傷のない健全な芋を選別し、日当たりや風通しの良い場所で薄く並べて十分乾燥させ、温度5~10°C、湿度70~80%で貯蔵します。

2 秋まき野菜の管理

(1) 追肥

気温が低下してくるこの時期の野菜は、生育期間中、安定して肥料を効かせることが大切です。また、キャベツ、ハクサイ、ブロッコリーは生育初期に十分に肥料を効かせ、葉を大きくしておかないと、収穫物が十分な大きさになりません。

植付け時、20日後、40日後化成444を2~4kg/a程度施してください。

(2) 中耕

秋雨の影響で、畝の土が締まります。土壌中の酸素補給のため、追肥後に中耕します。

あまり深い中耕は根を傷めるので、浅く行ってください。

(3) 害虫防除

コナガ、ハスモンヨトウ等の害虫の発生が増えてきます。葉裏や株元をこまめに観察し、できるだけ捕殺し、害虫密度を下げてから薬剤散布を行うと効果的です。

害虫対策として、モスピラン粒剤(1g/1株)などを植穴へ散布するのが効果的です。また、発生初期にはコテツフロアブル(2,000倍)などを散布してください。ただし野菜の種類によって使える薬剤が違いますので、登録を確認して使用してください。 <土居>

【栗】

1 病虫害防除

収穫後に残るイガは、病気や害虫の発生源になります。なるべく早く、園地の外に出し焼去するか、地中に深く埋めてください。

カイガラムシ類の防除のために12月中~下旬に、マシン油乳剤(95%)14倍を散布します。

2 施肥

12月中旬に、基肥として窒素成分で12kg/10a程度を施用します。

3 縮伐・間伐

栗は、樹冠内部に光が当たらないと下枝が枯れ込みます。樹冠内部にまで光を取り込み、充実した結果母枝を発生させるためには、縮伐・間伐を行い、樹冠と樹冠の間は1m以上間隔をとるようにしましょう。

4 剪定

果実の大玉生産のために、剪定作業は欠かせない作業です。

落葉が終わった頃から作業を進めてください。樹高を低くするとともに内部にまで光が入るように枝数を整理してください。切除した部位はトップジンMペースト等の保護剤を塗布し、枯れ込みを防ぎましょう。

<可部>

【花き・花木】

シキミの病虫害防除

(1) 害虫の発生が見られたら、トレボン乳剤2,000倍を散布します。輪紋葉枯病が見られる圃場では、トップジンM水和剤1,000倍を散布します。

病害を予防するために、下枝を伐採し、樹間を広く取り、通気性を良くして過湿を避けることが重要です。

(2) 越冬中のハダニ・カイガラムシ類対策として、1月中下旬にマシン油乳剤を散布します。また、アブラムシ類対策として3月下旬にダイリーグ粒剤12kg/10aを散布し、春先からの害虫発生を予防します。



輪紋葉枯病

<佐津間>

【茶】

1 秋整枝(10月)

一番茶摘採を遅くしたり、冬期寒害を受けたりする茶園では、春整枝を行います。それ以外の茶園では、平均気温が18~19°C以下になる10月中旬以降に秋整枝をします。深さは葉層を8cm以上残し、二番茶摘採より4~5cm程度上で整枝します。

2 春肥1回目(2月)

上旬に「えひめ茶有機100」を10袋/10a、または「えひめ茶有機グリーン1号」を7袋/10aを畝間に均一に施用し、中耕して土と混和します。

3 整枝、追肥(3月)

(1) 春整枝

秋整枝を行った園では、秋整枝した位置まで浅く化粧ならし程度とします。秋整枝を行わなかった園では、徒長枝を剪除し、摘採面の株ならしをします。

(2) 春肥2回目

上旬に「えひめ茶有機100」を8袋/10a、または「えひめ茶有機グリーン1号」を5袋/10aを畝間に均一に施用し、中耕して土と混和します。

4 凍霜害対策(3~4月)

(1) 防霜ファン設置園

防霜ファンの電源やサーモスタット等の稼働を確認し、時期にあった設定温度にします。

(2) 防霜被覆園

張線ワイヤーの断線を調べ、ひも等破損部分は取り替えます。

寒冷紗被覆は、嶺北(平坦部)の最低気温が8°C以下と予想されると必ず実施します。霧が発生した朝は、陽があたって周囲の温度が上がってから寒冷紗を開きます。 <中田>